

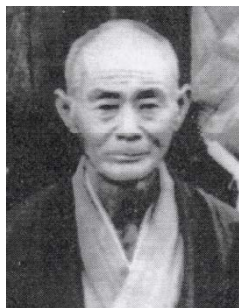
杉浦製糸所

明治・大正・昭和の時代、現在の小学校と崇福寺の間には、杉浦製糸所という生糸を生産する工場があった。この杉浦製糸所は、1898（明治31）年に杉浦藤助（1851～1925）が創ったものである。当時は、多くの生糸が外国に売れることから、農家では副業として蚕を飼い、生糸のもとになる繭を取り、工場に売って生計を立てていた。なかなか高いお金で売れたということから、蚕をととても大事に育てていたようである。

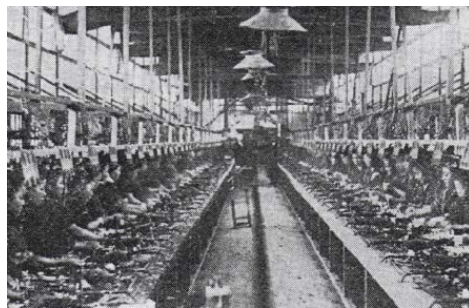
工場は生糸が売れるにつれて規模が大きくなっていき、働く人は地元の人だけではなく、九州や岐阜・三重・富山および石川など多くの地方から多数の人が来ていた。明治の終わりには従業員が200名を越え、昭和12年には500名ほどになっていたという記録がある。県下では1・2を競うほどの大工場となっていた。働く人のほとんどが若い女工さんで、小学校を卒業して間もない子どもが多く、また朝6時から夜6時まで休憩時間を除くと11時間も働いていたようである。この杉浦製糸所で働く女工さんが増えるに従って、大正から昭和初期の中島の街も活気を帯びていったようである。女工さんの月2回の休みには、西尾（軽便）鉄道で岡崎や西尾に遊びに行ったり、街で買い物をしたりしていたという記録がある。そのため、中島の街は、西尾鉄道の中島駅を中心にタクシー、料理屋、旅館など140軒ほどの店舗が連なっていた。今でも県道沿いに上町の杉本写真館、つるや呉服店、早川理髪店、新町の榊原酒店、弥寿来（飲食店）、だるま薬局、境のこめよしよし、雑貨のあぶ忠、マルス衣服店などがその頃から続いている。現在の中島には美容院が比較的多いのは、女工さんが多くいた影響を受けているかもしれない。

1931（昭和6）年には中島の新町に「睦劇場」という娯楽場ができ、芝居を上演していた。この名付けは早川龍介ということである。女工さんや地元の人たちなど700人を収容できる大きな劇場であったようである。1943（昭和18）年「睦劇場」の跡継ぎが兵隊に召集されたため平坂に移った。また、1948（昭和23）年杉浦製糸所の乾燥場を利用して「マルス劇場」ができた。初めの頃は芝居が中心であったが映画館となり、1960（昭和35）年頃、テレビの普及などで閉館となった。

杉浦製糸所は、第二次世界大戦が激しくなると、1941（昭和16）年、国の命令で落下傘を作る工場になった。工場の名前も、「日本蚕糸（さんし）製造六ツ美工場」となった。戦後の1946（昭和21）年に高橋用水よりも北側の工場は4つの製糸業者が集まり「東海製糸」となったが、1957（昭和32）年には廃業した。その後、工場は1961（昭和36）年から「飯島紡績」に、1968（昭和43）年から「福田紡績」となったが、1986（昭和61）年に火事により工場は無くなってしまった。



杉浦藤助



杉浦製糸所内部



杉浦製糸所外観 現在の小学校付近からの遠望1940年頃



陸劇場 正面
1917(昭和6)年興業許可
1936(昭和11)年撮影
つるや呉服店提供



本項は以下の資料を引用している。

[六ツ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 高須 亮平
発行日 2012(平成24)年3月31日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社

[わたしたちのふるさと 六ッ南 114 選]

監修者 総代会長 平井 良美
社教委員長 近藤 武美
著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6年児童 114名
(平成25年3月19日卒業)
編者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6年担任
権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛
発行日 2013(平成25)年3月1日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社
製本 ブラザー印刷株式会社
発行 岡崎市立六ツ美南部小学校